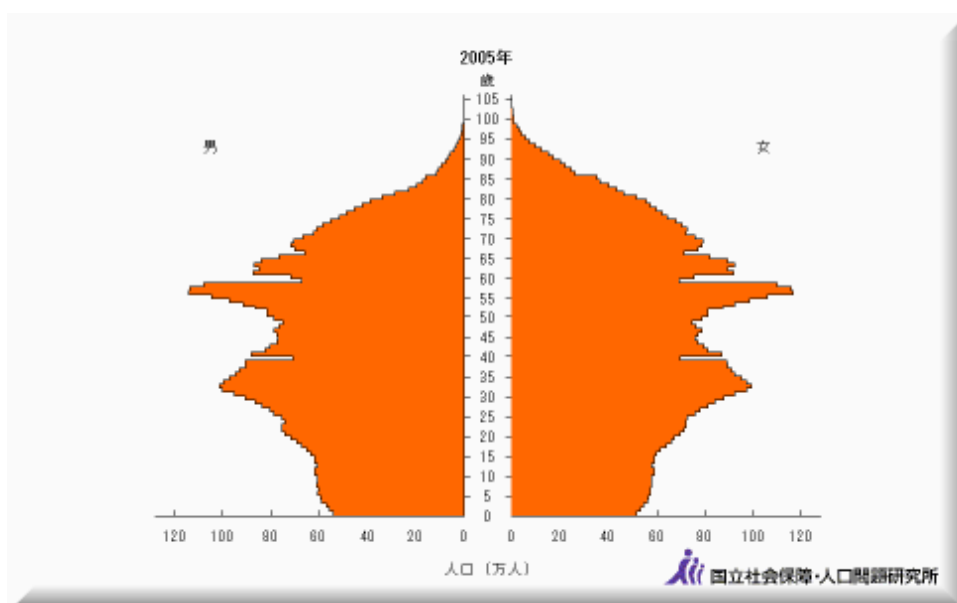
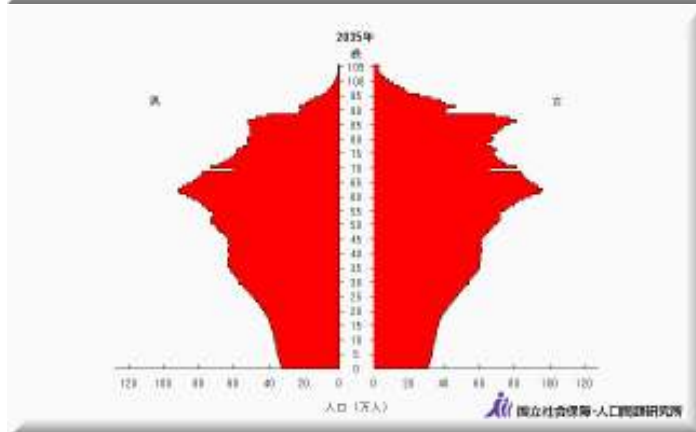


1950（昭和25）年の人口ピラミッドを見ると、1947～1949年にかけての「団塊世代」の量的大きさが、改めて確認されます。



1950年から55年後の2005（平成17）年人口ピラミッドでは、「団塊世代」は、55歳から60歳までの山として確認できます。



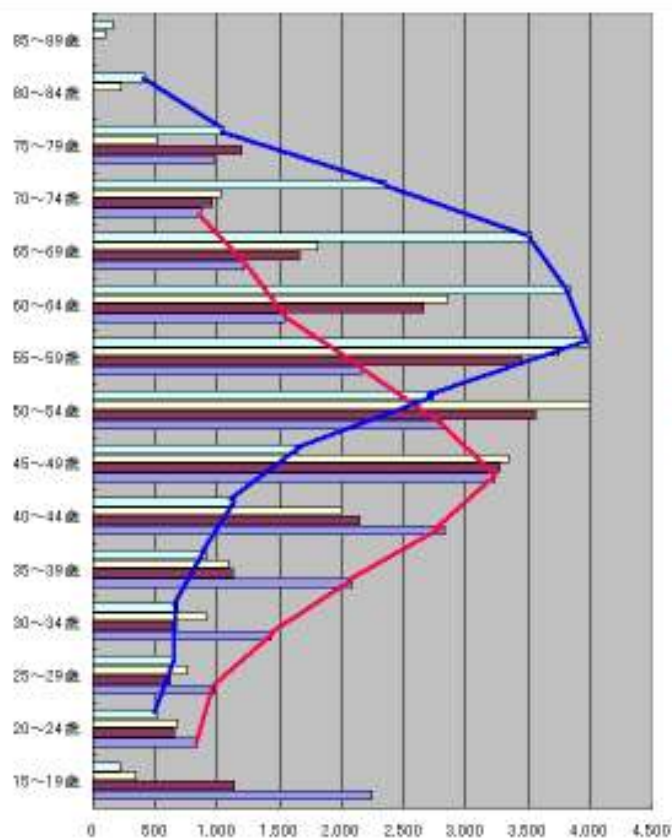
2005年人口ピラミッドでは「団塊ジュニア」世代も見えますが、「団塊孫」世代の山は見えていません。2035年人口推計ピラミッドでも、大きな山としての「団塊孫」世代は見えません。

「次世代に負の遺産を残すな」という声をよく聞きますが、そのかけ声の下、世代再生産もできないほど、「団塊ジュニア」世代を

「食い」潰している社会構造があるように見えます。

総務省統計局の平成 20 年 7 月 1 日現在確定値によれば、総人口は 1 億 2770 万 4 千人で、前年同月に比べ、6 万 8 千人 (0.05%) の減少ですが、日本人人口は 1 億 2597 万 3 千人で、前年同月に比べ、13 万 4 千人(0.11%) の減少とされており、日本の総人口の減少幅は、外国人の参入によって小さくなっているといえます。

世代再生産もできないほど、「団塊ジュニア」世代を「食い」潰している日本の社会構造が、将来的に即戦力として若年外国人労働者への依存を益々強めることを人口ピラミッドや総人口の推移も示しているといえます。



左はあいりん地区の年齢構成ですが、先の人口ピラミッドのように男女別ではなく、男女あわせたものです。男女別にすると、左右対称に成らず、ピラミッドとはほど遠いものになります。

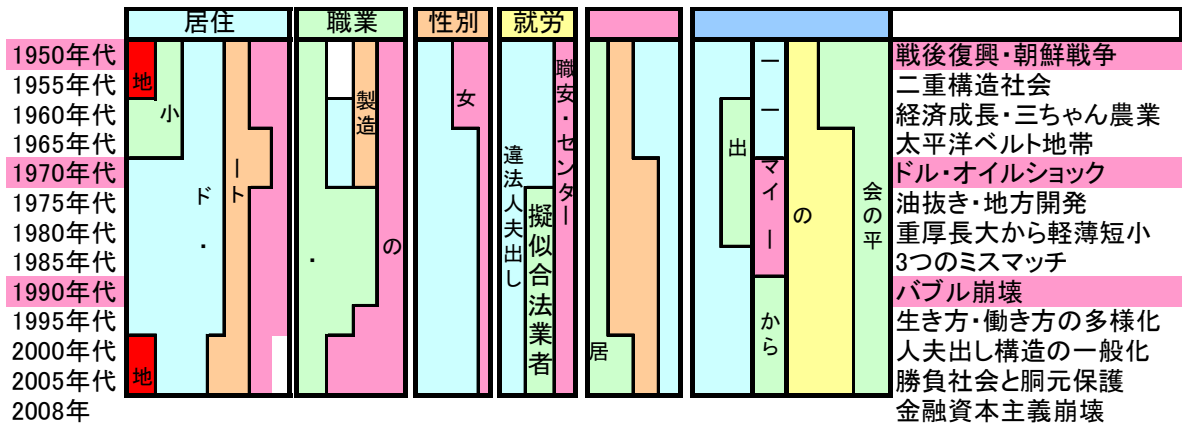
さて、1975 年時点では、団塊の世代は 26～28 歳ですが、あいりん地区の山は、その年齢階層にはなく、45～49 歳にあります。

1980 年時点では、団塊の世代は 31～33 歳です。人口ピラミッドの山はここにありますが。しかしあいりん地区では、同じように 5 歳は繰り上がっています

が、50～54 歳です。次の 5 年間では、山は動かず、50～54 歳に留まり続けます。

2005 年時点では、団塊の世代は 58～60 歳です。あいりん地区の山も、55～59 歳となり、この限りにおいて「世間並み」となりますが、日本全体の人口ピラミッドと異なるのは、「団塊ジュニア」世代の山が欠けていることです。また、団塊の世代以前の「戦争の傷跡」も見えません。左右対称に近い形では、勿論ありません。

あいりん地区が、長らく職住分離のベッドタウンとして機能してきたと考えれば、日本各地のベッドタウンの高齢化問題と同じ現象ともいえます。地域振興のために、工場を誘致し、派遣労働者の単身アパートや寮が増えたわけではありませんので、ここ 2～3 ヶ月で大きな問題となった、派遣や期間工の「切り捨て」問題とは、今のところ距離があります。



釜ヶ崎人情
 歌 三音英二 作詞 もず唱平
 作曲三山敏 (1968年発売)

立ちん坊人生 味なもの
 通天閣さえ 立ちん坊さ
 だれに遠慮が いるじゃなし
 じんわり待って 出直そう
 ここは天国 ここは天国 釜ヶ崎

身の上話に オチがつき
 ここまで落ちたと いうけれど
 根性はまる出し まる裸
 義理も人情も ドヤもある
 ここは天国 ここは天国 釜ヶ崎

命があつたら 死にはせぬ
 あくせくせんでも のんびりと
 七分五厘で 生きられる
 人はスラムと いうけれど
 ここは天国 ここは天国 釜ヶ崎

あいりん地区人口では、日本全体の人口ピラミッドのような左右対称に近い図は描けませんし、たとえ片側だけであろうと、その時々日本全体の人口ピラミッドとは似ていない図にしかありません。今の釜ヶ崎の構成にあえて似ている図を捜すとすれば、2035年の人口予測ピラミッド図が近いようです。

そのような特異な人口構成になっているのは、他の地域でも見られることかも知れません。たとえば、農村部ではあいりん地区とは別に女性が多い形で「団塊ジュニア世代」以降が極端に欠けている図になっている地域もあることでしょう。

それらとあいりん地区の違いは、住民の移動関係にあると思われます。

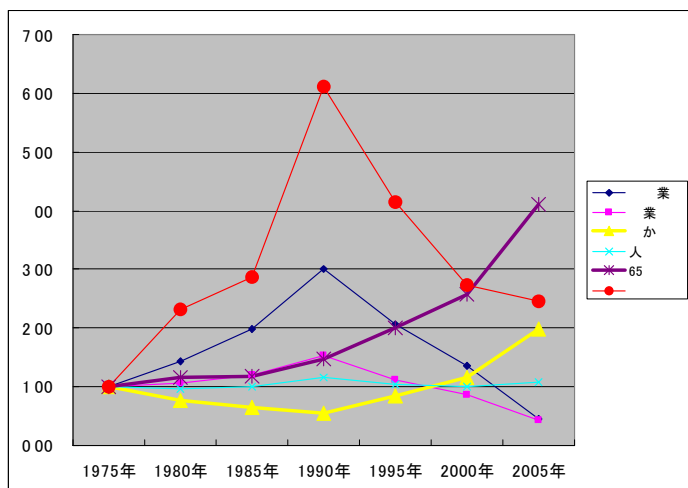
農村部は一方的な流出の結果であり、あいりん地区は、出入りの結果です。

大都市へ、あいりん地区へ人が集まるのは、端的に言えば「見過ぎ、世過ぎ、方便（たつき）を求めて」ということであろうと思います。

戦後の混乱期・復興期に、ほぼ男女同数の人たちが、大阪に、そして、その中でも「分」の悪い人たちが釜ヶ崎へ集まりました。

高度成長期に住民の入れ替わりが見られるようです。所帯持ち、女性が地区を離れ、農村から、漁村から男たちが、都市へ、太平洋ベルト地帯へと集中します。集団就職列車は1954年（昭和29年）に運行開始され、1975年（昭和50年）に運行終了されるまでの21年間に渡って就職者を送り続けたといわれていますが、その列車にすら乗ることができなかった人々、あるいは就職先で満足をえられなかった人が、転職を重ね、釜ヶ崎にやってきたのです。

大雑把にあって、1975年までは平均年齢の上昇はそう大きくありません。日本全体のパイの拡大期には、釜ヶ崎地区の人口流動性は高かったといえます。「じんわりまって でお」す機会もなくはなかったと考えられます。



左図は、1975年を1として、国勢調査年ごとの増減を示したものです。1975-1985年にかけて仕事量が増加し、65歳以上人口は停滞的です。平均年齢も40歳後半で1年ずつの増加に留まります。重厚長大産業あるいは繊維関連での倒産・リストラを背景に、中高年齢者の出入りが多かった時期になります。

1990年、仕事量は最大の伸びとなり、建設業従事者も最大となります。

一方、65歳以上も増加が著しくなります。年金受給年齢前の肩たたき退職組や年金が期待できない高齢者の釜ヶ崎への参入が増え、加齢を重ねた結果と思われます。

また、雇用調整弁の担い手が、公共事業＝建設産業で働く臨時日雇いから製造業あるいはサービス業の若年・中年を軸とした派遣労働者へと移ったことの反映でもあります。釜ヶ崎という中継地点が、不要となった時代です。「寄せ場」でなく、工場周辺の「労働下宿」が主流となった時代といえます。釜ヶ崎の流動性は、小さくなります。

	地人	業	1	65	か
1975年	23 217	13 307	2 2 9	1 838	5 823
1980年	22 233	1 055	1 592	2 120	66
1985年	23 083	16 030	1 136	2 156	3 761
1990年	27 080	20 61	667	2 71	3 238
1995年	23 978	1 827	569	3 681	901
2000年	23 01	11 520	19	727	6 735
2005年	25 2 1	5 7 0	3 1	7 552	11 608

国勢調査によれば、釜ヶ崎では地区人口の稼働年齢層で職業について記載にないものが、常に3千～4千人あるのが普通の状態と考えられます。ただし、2000年までは、2005年には1万人を越えます。

	15人	業者	生保護	年金	.		
2005年	2 900	5 7 1	6 500	7 659	2 500	1 700	800
	100 0	23 1	26 1	30 8	10 0	6 8	3 2

15歳以上地区人口について、仮定で振り分けると、上記表になると考えられます。

2005年、世帯分類では一般世帯が14,061人、その他世帯が11,180人でした。

2005年で、活保護と家事・通学の合計は推定9,000人。15歳未満人口は、341人でした。その合計(9,341人)と一般世帯人員との差、4,720人は、一般世帯に所属する従事者であると考えられます。

従事者(5,741人)の中で、その他世帯に所属するのは、5,741人-4,720人=1,021人と計算されます。その他世帯11,180人から1,021人を引くと、10,159人。この数字は、15

歳以上人口から従事・生活保護等を引いた「その他」の人数と合っています。

このことから、「その他」の人々は、世帯分類ではその他世帯に含まれていると考えることができます。

では、その他世帯に属する 10,159 人はどのような人なのでしょうか。

あいりん地区の中には、生活保護施設が 2 箇所あります。大阪自彊館愛隣寮（定員 100 名）、大阪自彊館三徳寮（定員 150 名）です。

法外援護の生活ケアセンター（定員 224 名）とあいりん臨時緊急夜間避難所（定員 1,040 人＝実人員 800 で計算）もあります。

地区内の三公園やセンター周辺、山王商店街・高速高架下などで野宿をする人々もいます。それらの合計を 2,500 人とすると、7,659 人が簡易宿泊所で生活していると推定せざるをえません。

2005 年のあいりん人口の内、65 歳以上は 7,552 人、上記表「仮定」の「年金・仕送り」に近い数字ですが、「生活保護」の相当部分が 65 歳以上（約 7 割－2008 年）と考えられますから、65 歳以上 7,552 人の内 5,300 人は生活保護と考えられます。

そうすると 7,659 人の内 5,300 人は 65 歳以下と考えられ、年金の可能性のあるのは約 2,300 人となります。

2005 年で 65 歳以上は、1940（昭和 15）年生まれです。

2005 年あいりん人口で、60-64 歳は 3,842 人でしたが、これらの人々は 1945（昭和 20）年以前の生まれになります。年金受給と全く関係のない年齢とは言い切れません。

60 の 厚生年金 開年							60 の 厚生年金 開年						
生年	60	61	62	63	64	65	生年	60	61	62	63	64	65
大 15年 2							大 15年 2						
16年 1							16年 1						
16年 2							16年 2						
18年 1							18年 1						
18年 2							18年 2						
20年 1							20年 1						
20年 2							20年 2						
22年 1							22年 1						
22年 2							22年 2						
2年 1							2年 1						

7,659 人の内、60 歳未満は多くて 3,000～3,800 人と計算されます。

この人たちが、簡宿住まいで、収入源を推定できない層として残ります。

もう少し推定を重ねてみます。

65	生 保護	5 300
	7 552 生保	1 000
		1 252

65 歳以上の人は、生活保護の他、野宿・施設・一般世帯の年金受給者が考えられます。それらを推定値で入れると、簡宿住まいの 65 歳以上の推定値は、1,252 人となります。

60-64歳	生 保護	800
	3 8 2 生保	900
		2 1 2

60-64 歳人口も同じように、生活保護の他、野宿・施設・

の 業 7 659	65	1 252	年金
	60-64歳	2 1 2	
	60	265	

一般世帯の年金受給者が考えられます。それらを推定値で入れると、簡宿住まいの 60-64 歳の推定値は、2,142 人となります。

先の「仮定」表の内「年金・仕送り」の項の人員 7,659 人から 60 歳以上人員を引くと、4,265 人が残ります。

これらの人々は、国勢調査上、産業に従事しておらず、年金受給している可能性のない人々と考えられます（もと船員・炭坑労働者は 55 歳から年金受給できますが）。

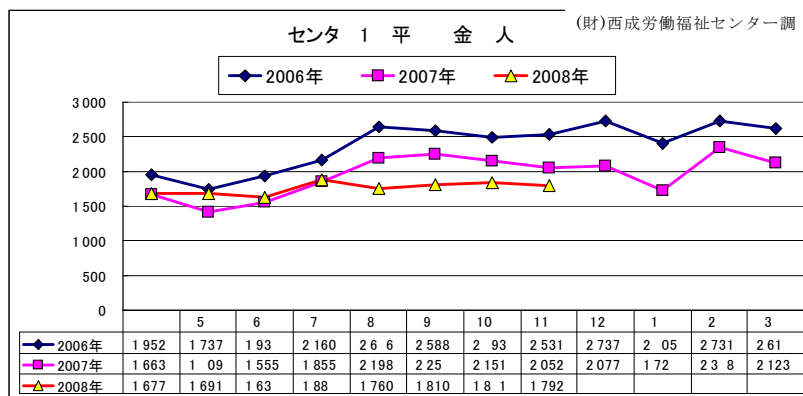
簡宿住まいで、時々センターから就労するものの、建設産業で働いているという「日雇い専門意識」を持たない層が、該当項目を未記入で提出した結果と考えられないでもありません。「労働下宿」を渡り歩く間の休息の場として釜ヶ崎を利用している可能性もあります。

	15人	業者	生保護	年金	60業	.		
2005年	2 900	5 7 1	6 500	3 39	265	2 500	1 700	800
	100 0	23 1	26 1	13 6	17 1	10 0	6 8	3 2

以上により、仮定を整理し直す

と、上記になりますが、釜ヶ崎の人口の流動性は著しく低下しているといえるでしょう。

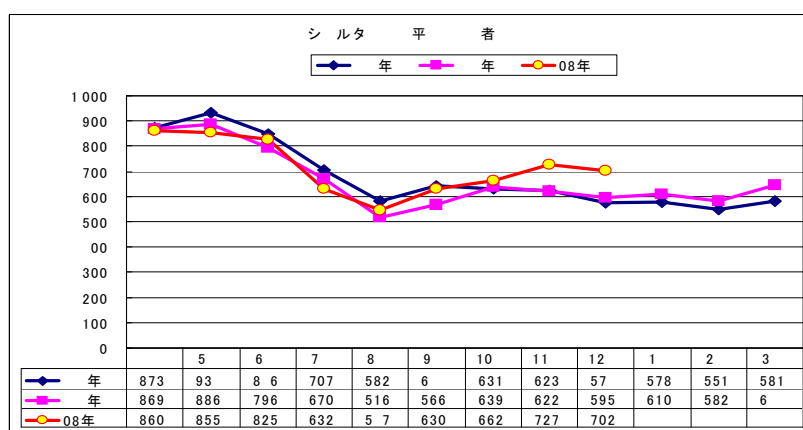
釜ヶ崎の日雇労働者は減少し、仕事もまた 2007 年、08 年と減少を続けています。



08 年は、7 月以後の弱化の仕事の増加という現象も見られず、横ばい状態となっており、あいりん臨時緊急夜間避難所（シェルター）利用者が増加しています。

夜の不景気の影響が、いち早く現れているといえますが、これまでの釜ヶ崎の経験からすれば、小さなものといえます。これも街の固定性が高くなっていることの表れです。

「派遣」という働き方が失われても、「日雇労働市場」へ「身過ぎ



世過ぎ」を求めてくるという時代ではなくなっています。簡宿も、アパートへの転業で簡宿としての收容能力が低下しており、野宿に至る一歩手前の受け皿としても、かつてより小さくなっています。

釜ヶ崎はある意味で、落ち着いた街へと変わりつつあるといえます。

1) 生活保護受給者

		ん			
		出	入	保護	保護
1973年	8年	5 19	722	2 7 1	52 8
1974年	9年	5 061	269	2 33	8 1
1975年	50年	5 095	136	2 1	7
1976年	51年	832	026	2 390	9 5
1977年	52年	5 163	20	2 827	5 8
1986年	61年	8 326	7 039	5 629	67 6
1987年	62年	9 0 7	7 723	6 302	69 7
1988年	63年	8 611	7 162	5 670	65 8
2005年	平成17年	10 31		23	1 1
2006年	平成18年	9 607		3 381	35 2
2007年	平成19年	9 72		2 75	29 1

あいりん地区では生活保護世帯が7,000 を越えたといわれていますが、その影響は、西成消防署海道出張所の活動にも現れています。

1973 年～1988 年までは、西成消防署発行「あいりんの救急」という冊子から抜き出したものです。2005～07 年は、西成消防署を通して手に入れた海道出張所

の記録です。

大きな違いは、行旅病人として生活保護を利用するであろう「要保護」の占める割合の変化です。1987 年は出場件数 9,047 件に対して、要保護は 6,302 件（69.7%）でしたが、2007 年は 9,472 件に対して、2,754 件（29.1%）と激減しています。この激減の原因は、居宅保護に伴う医療扶助の利用者が増加したことにあります。

課題は、医療扶助で通院できるにもかかわらず、なぜ、救急車の利用数が減少しないのかというところにあります。

生活形態が変わったのに、生活者の意識が変わっていないと見えます。

平成 17 年版厚生労働白書では、「すべての生活保護受給世帯は、自立に向けて克服すべき何らかの課題を抱えているものと考えられ、またこうした課題も多岐にわたるものと考えられる。このため、自立支援プログラムは、就労による経済的自立のためのプログラムのみならず、身体や精神の健康を回復・維持し、自分で自分の健康・生活管理を行うなど日常生活において自立した生活を送ること、及び社会的なつながりを回復・維持し、地域社会の一員として充実した生活を送ることを目指すプログラムについても幅広く用意し、生活保護受給者の抱える多様な課題に対応できるようにする必要がある。」と書かれ、①福祉事務所による就労支援プログラム ②精神障害者就労支援プログラム ③高齢者健康維持・高齢プログラム ④生活習慣病患者健康管理プログラムが具体的に例示されていました。

あいりん地区においては、サポーターハウス協議会を中心に、結核予防のための誕生月検診が呼びかけられており、区との連携で拡大が目指されています。昨年からは、この活動をベースに、結核以外の健康相談活動が加わりました。

サポーターハウスの中には、区主催行事での駐輪整理・清掃をボランティアで分担するグループを育成しているところがありますが、西成区地域福祉アクションプラン推進委員会生活保護部会では、その活動を広めるために、地域での清掃活動等に生活保護受給者が参加するよう促し、地区内山王連合町会や隣接の弘治連合町会で取り組みがはじめられています。

生活保護受給者対象の活動としては他に、識字学級や町会に所属しない高齢者の老人会活動やボランティア活動の推進（まち歩きガイドヘルパー・紙芝居慰問等）が行われています。

2) 町会に参加している人々

萩之茶屋連合振興町会では、大阪市の助成を受ける「萩之茶屋小学校・今宮中学校周辺まちづくり研究会」が活動を続けていますが、助成終了後の活動を見据え、メンバーが拡張された「萩之茶屋地域まちづくり拡大会議『つなぎ隊』」が結成されています。

あいりん地区の一部も地域内にある今宮連合振興町会では、「萩之茶屋駅・天下茶屋駅周辺まちづくり研究会」の活動後、NPO 法人まちづくり今宮が結成され、地域の盆踊りを復活させるなどの活動を続けています。

3) 社会的援護を要する人々

野宿を余儀なくされている人々、野宿に至おそれのある人々が、地域内に多数生活しており、障がい者作業所や日常生活支援、生活相談活動、就職支援、夜回り、仕事づくりなどが多くの団体によって取り組まれています。

今後、社会経済状況の悪化により、増加することが予想されます。

4) 共通する課題

・釜ヶ崎社会人大学

2) の人々の一定部分を除き、この地域で生活する人々は、社会的排除過程を経て今日の生活となっている側面が強いと考えられ、なによりもまず肯定的自己認識の涵養が手がけられる必要があると思われます。

この点、韓国やアメリカの取り組み事例が参考となるように思われます。

以下は、水内さんが取材中の韓国事例報告です。

「聖フランシスコ大学というのがあるんですけど、野宿者のプライドを高めるために人文学講座っていうのを開いて、現在4期まで終了して来年から5期なんです。

この講座に参加する人は今まで野宿者だけだったんですけど、野宿者プラスチョッパン居住者、一般の貧困者も包括して対象としていきたいと考えています。

この人文学講座を最初20名くらいが受けて16名くらいが修了するんですけど、修了した方たちは途中でやめたり参加しなかった方たちに比べて居住や就労状態を維持する比率が割合高い場合があります。中には家族のところに戻る方たちもいます。

講座の内容は哲学、歴史とか文化芸術史、作文とかとソウル大の教授とかのクラスの人が講師になって教えています。市民大学みたいですけど、野宿者に。アメリカのクレメントコースというのがあるって、クレメントさんが韓国に直接来て、それからこれを運営することになった。いわゆる野宿者など極限的な生活層へ人文学を教える。成果があるのが認められて、ソウル市がキョンヒ大学とコンソ

ーシウムで野宿者と地域自活センターに参加する受給者を対象とした人文学講座を大学内に設置しました。

基本的に心理治療プログラムとか心理学で使っているのとは違って本当に人文学で、施設だとかインフラとかじゃなくて精神的なニーズに応えることによって、その人の変化を促すというそういう意図。7時から9時まで。

- 釜ヶ崎コミュニティーセンターの創出

西成市民館がありますが、基本は貸し会場です。今後活発になると予想される活動の事務局機能を置く場所としては不適切です。求められるイメージは、大学のサークルボックスの集合体です。三角公園南の夜間宿所の一棟を転用する案が、最も安上がりで、現実的です。

- 地区内でなく地区外での活動の場の開拓（ボランティア活動、お仕事、創業、開店）

萩之茶屋商店街や動物園前商店街の空き店舗を活用した実習商店で修業し、ご用聞き一安否確認一を行う自営業者を西成区内全域に展開する。

等々を、企画推進できる人材が必要です。